

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷五十第

行發日一月十年一十正大

論叢

傳統派の社會連帶思想 文學博士 米田庄太郎
 時機尙早なる社會革命の企 文學博士 河上 肇
 階級に就いて 文學博士 高田 保馬
 經濟と自由 經濟學士 堀 經夫

時論

物價調節問題 法學博士 河田 嗣郎
 營業稅論 法學博士 小川郷太郎

說苑

租稅負擔の地方別研究 法學士 汐見 三郎

雜錄

一九二一年英領印度勞働爭議 法學士 柴田規矩三
 小賣相場と卸賣相場 法學士 汐見 三郎

時機尙早なる社會革命の企について

河 上 肇

- 一、時機尙早なる社會革命は生産力の減退を齎すこと——英領殖民地に於ける奴隸解放の實例
- 二、時機尙早なる社會革命は失敗に終ること——たとひ之を目的とする政治革命は成效するも、其れは單なる政治革命に止るべきこと

マルクスの有名なる唯物史觀の公式の中には、次の如き句がある。『一の社會組織は、總ての生産力が其の組織内で餘地ある限り其の發展を爲し遂げた後でなければ、決して顛覆し去るもので無く、又新たな、より高度の生産關係は、そのもの、物質的存在條件が古き社會の胎内に於て孕まれたる以前に於て、決して發現し來るものには無い。』これについて私は茲に一つの問題を提供して見たいと思ふ。それは、社會の生産力が従前の社會組織の下でまだ發展の餘地があるに拘らず、之を顛覆せんと企てた者がある時には、その結果は何うなるだらうかと云ふ事である。思ふに此の問題は、一見小さなやうであるけれども、實は、過去の歴史に遡り、社會組織改造の企が失敗に終つた事例の主なるものについて、種々の史實を探究し、之を綜合することにより、始めて答へらるべきものであつて、少くとも私の今、容易に答へ得ざる問題である。乃ち茲に述べやうと

する所は、只この問題に對する些細なる一二の示唆に過ぎない。

一、時機尙早なる社會革命は生産力の減退を齎すこと

——英領殖民地に於ける奴隸解放の實例

生産力が従前の社會組織の下でまだ發展の餘地があるにも拘らず、強いて之を顛覆しやうと企てる時には、そこに先づ生産力の減退といふ現象が起る。此の事は奴隸解放の歴史を見ても、その一斑を知ることが出来るやうに思ふ。

一八六一年ロンドンで發行されたメリヅヴェールの『殖民及び殖民地に關する講義』を見るに、第十一講のうちに次の如く述べてある。¹⁾

『思ふに、奴隸解放當時に於ける英領奴隸植民地は、其等の商業的狀態に關聯して、三つの分類に分たれ得ることが、發見せらるゝであらう。

『第一は、吾國の植民地中最も古いもので、Antilles (西印度群島) のうちの小さな島々に設けられたものである。……此等の地方に於ては、土地は殆ど總て占領され、人口は極度に稠密で、耕作は古くから行はれ、且つ資本が蓄積されてあつた。バルバドースがさうであつた、それは西半球に於て、又恐らくは世界に於て、最も人口の稠密な場所であつた。アンティグアもさうであつた。また恐らくはセント・サインセンツ、ドミニカその他一二の場所がさうであつた。

1) Herman Merivale, Lectures on Colonization and Colonies. (Delivered before the University of Oxford in 1839, 1840, & 1841). 1861, p 313 et seq.

此等の場所に於ては、人口及び生産が既に長い年數の間、殆ど靜止的であつた。……此等の殖民地は奴隸賣買の廢止のために害せられなかつた、勞働の供給が何時でも十分だつたからである。此等の地方は、奴隸解放の直接の結果によつて害せられることが、他の如何なる地方よりも少かつた。ニーグローは仕事を繼續して行くより外に何等の資源をもたなかつたからである。そこには彼等の所有し得べき無主の土地はなかつた、彼等が手頼りにし得るやうな、生活資料を得るための獨立の方法はなかつた、習慣が彼等に對し望まじきものたらしめた様々の奢侈品に至つては、猶更のことであつた。此等の地方の大部分に於ては、生産の上にも、また社會生活の常態の上にも、何等シリアスな中斷は全然起らなかつた。』

メリヴェールが第一の分類に入れてゐる此等の植民地では、『人口及び生産が既に長い年數の間、殆ど靜止的であつた』といふことによつて明かなる如く、從來の生産方法は既に行き着く所まで行き着いてゐて、『總ての生産力が其の組織内で餘地ある限り其の發展を爲し遂げ』てゐたのである。だから『奴隸解放の直接の結果によつて害せられることが、他の如何なる地方よりも少かつた』ので、『生産の上にも、また社會生活の常態の上にも、何等シリアスな中斷は全然起らなかつた』のである。そのみでなく、『既に長い年數の間、殆ど靜止的であつた』生産は、奴隸の解放後、次第に發展することになつた。メリヴェールは、前掲著書の附録の中に、次の如く述べ

てゐるのである。

『バルバドースに於ては、奴隸解放のため惹起された産業の擾亂は、輕微で且つ一時的であつた。殖民地は間もなく、その以前の繁榮よりも、より大なる繁榮を恢復した。土地の面積は極度に制限されて居り、その地方は次第に減退しつゝありしに拘らず、生産は増加した、さうして、今も猶ほ不斷の確實さを以て増加しつゝある。』²⁾

メリヴエールは更に第二類の殖民地について次の如く述べてゐる。

『次の分類に屬する殖民地に在つては、豐饒な土地又は便利な位置に在る土地は總て耕されてゐて、且つ其の地方は次第に枯渴しつゝある。けれども其處にはまだより少い價値の性質をもつた無主の土地が澤山に残つて居り、人口も亦た全體の面積に比例しては稠密でない。こういう事情は……吾國の最も重要な熱帶殖民地たるジャマイカに於て最も顯著である。……砂糖を栽培するために最も適した土地は、その面積が甚だ限られてゐるやうであり、且つ一世紀以上上に亘つて使用されてゐた。けれども其處には、ニイグロ労働者の必要的欲望を充すに十分だけの、食料及び其の他の物を作り出すために利用され得べき、澤山の開拓地及び未開地があつた。……此等の殖民地は、多分、奴隸賣買の廢止のために損害を蒙つた。さうしてニイグロを雇傭労働に服せしむべく強制することの困難から、——彼等は彼等自身の食料を得るた

めの土地及び其の他の資源を手許に有つてゐたので、——奴隷解放以來、今も猶ほ弱つてゐる。』³⁾
なほ多少の重複を厭はず、更に附録中に記載せる所を抄譯すれば、次の如くである。

『ジャマイカが第二類の主要なるタイプである。ジャマイカでは、さうして殆どジャマイカに於てのみ、生産は奴隷解放以後減退した、さうして其れは極めて甚しかった、その地積の著しき部分に於て砂糖の耕作は廢止され、其等の土地は、其れほど生産的でない他の用途に充てられるか、又は放棄されて藪になつた。……其處には實に廣大な處女地があつたが、それは甘蔗の耕作には適しなかつた。……耕作されてはゐないけれども併し豊饒な地味をもつた土地や、廣大な山地の放牧地や草原があり、其處では人々が僅な費用で生活もし繁殖もすることが出来るといふ事情は、商賣上の見地から言ふと、善いことではなくて、一つの弊害であつた。是がため解放された労働者は、きまつた仕事をせずに生活を支へて行くことができ、従て甘蔗栽培者が彼等を雇はうとしても、彼等は高い賃銀の下に始めて不承不承に且つ不規則に労働を提供するに過ぎなかつたのである。』⁴⁾

即ち此等第二類の殖民地にあつては、前に掲げた第一類のものと反對に、奴隷の解放は、却て生産力の減退を齎したのである。なほメリヰヰエールが第三類として掲げてゐるものは、第二類の特徴の一層甚しいものである。即ち『其等の或者にあつては耕地の地味がまだ枯渴されずに居り、

3) p. 315.

4) pp. 340, 341, 342.

他の者にあつては豊饒な且つ無主の土地が澤山にある』⁵⁾といふやうな殖民地のことで、トリニダド、ギニア等が其の實例とされて居る。此等の殖民地にあつては、奴隸の解放は、一層甚しき生産力の減退を齎した。即ち『砂糖及び之に關聯せる物質の生産は、奴隸解放の第一年度に於て、ギニアでは以前の四分の一に下落したやうである、同様なことが又トリニダドでも起つた。』⁶⁾

メリヴェールの記述せる所によれば、『自然的の富を以て溢れてゐる此等の地方に於ては、ニトグロウにとり、生活資料を得ることは容易であつた。……彼等は彼等の生活を維持するために依頼することの出来る澤山の土地をもつてゐた。……彼等は最も法外な賃銀の提供によつてのみ勞働に従事せしむることが出来た。』これが奴隸解放のために俄に生産の減退を見るに至つた原因である。

豊饒なる無主の土地が多量に殘存する場合に、奴隸制の廢止が生産力の減退を齎すといふことは、賃勞働制の成立が生産手段の所有より隔離されたる多數勞働者の存在を前提とすといふことを、明白に證明するものである。生産手段の所有より隔離された勞働者が、生産手段の所有より隔離されて居るといふ故を以て、自己の勞働力を他人に賣りて生活する外、他に何等の生活方便を有せざるに至る時、其等の勞働者は始めて所謂自由勞働者となることが出来る。法律上解放されて自由となつても、自ら生産手段(奴隸制の行はれてゐた當時に在つては、土地は其の主なる

5) p. 316. 6) p. 317.

もの)を利用し得ざる彼等は、獨立して生計を營むことが出来ないから、誰かに雇はれて勞働に従事しなければならぬ。だから、まさかの時には何時でも之に立籠ることの出来るやうな生産手段が社會に残存してゐる場合に、多數勞動者の勞働を結合しやうとすれば、——勞動の社會的結合の發展は、物質的生產手段(土地の開拓又は道具及び機械の發明等)の發展と共に、社會的生產力の發展の最大條件である、——其等勞動者の自由を奪うて之を奴隸とするの外はないが、社會の事情が變化して、たとひ奴隸を解放しても、手頼るべき何等の生産手段が彼等によつて見出し得られざることになれば、彼等は其の生活を維持するがために、どうしても或る有力者に手頼らなければならなくなるから、多數勞動者の勞働の結合は依然として繼續され、且つ勞動者は所謂自由を得たるの故を以て其の能率を増進し、その結果、社會の生産力は以前よりも著しく増加することになるのである。ところが、奴隸を解放しても手頼るべき何等の生産手段が彼等によつて見出し得られざることになる爲めには、その奴隸制の下に於て、開拓され得べき有らゆる自然的富源が開拓され竭し、人口も亦た出來得る限り増加して、一方では無主の富源が乏くなつて來て居ると同時に、他方では生活を要求する人口が有り剩つて來てゐなければならぬ。簡單に言へば、從來の社會組織の下で社會の生産力が發展の餘地ある限り發展し了へた後でなければならぬ。もし此の時期に先だつて奴隸の解放が行はれたならば、解放されたる奴隸は各自が無主の富源に立

籠ることにより、小規模なる孤立的の自足經濟に復歸することが出来る。即ち奴隸主の支配の下に統一されてゐた多數勞動者の勞動の結合は、強制的束縛の解除と共に、忽ち解體されて仕舞つて、生産組織は、より高度のものに進展する代りに、却てより低度のものに退却して仕舞ひ、その必然の結果として、生産力の減退を齎すのである。マルクスが『一の社會組織は、總ての生産力が其の組織内で餘地ある限り其の發展を爲し遂げた後でなければ、決して顛覆し去るもので無く、又新たな、より高度の生産關係は、そのものゝ物質的存在條件が古き社會の胎内に孕まれたる以前に於て、決して發現し來るものではない』と言つたのは、まことに其の通りである。

二、時機尙早なる社會革命は失敗に終ること——たとひ之を目的とする

政治革命は成效するも其れは單なる政治革命に止まるべきこと

生産力が従前の社會組織の下でまだ發展の餘地があるにも拘らず、強いて之を顛覆しやうと企てる時には、生産力の増進の代りに其の減退が起ると云ふことは、以上述べた如くであるが、言ふまでもなく、生産力の不斷の發展は社會進歩の第一次の條件であるから、尙早なる社會組織の改造は、當該社會の退歩滅亡を招くに過ぎない。従て其れは失敗に終らなければならぬ。

だから、例へば、今日の資本主義の組織に如何なる弊害が伴うて來やうとも、社會の生産力が其の組織の下でまだ發展の餘地ある限り、——それは此の組織がまだ社會のため役立つてゐる

と云ふ證據なのだから、——資本主義を顛覆しやうとする企は、當然不成功に終るべきである。勿論、資本主義の組織の下で發展し得べき生産力の極限が何れだけであるかと云ふことは、今日吾々の智識を以てしては、之を精確に豫測することが困難である。もし其れが過去に於ける一定期間の觀察に屬するならば、吾々はその期間に於ける生産力の消長を顧みることにより、其處に果して生産力の發展が引續き行はれてゐるならば、それを以て社會組織がまだ行き詰つてゐない證據とすることが出來、また果して生産力の發展が久しく停止の状態に滞つてゐるならば、それを以て社會組織が已に行き詰つて仕舞つた證據とすることが出來るけれども、之と異り、それが現在に對する觀察であるならば、社會組織は果して今日を以て行き詰つたものと看做すべきか否か、それを判斷することは、何人にとつても甚だ困難である。唯物史觀を固執してゐたマルクスやエンゲルスでさへ、早くも一八四八年代に於て社會革命の可能を信じてゐたと云ふことは、ただ此の點のみから説明することが出來る。けれども其の後、世界各方面の資本主義國に於ける生産力の發展は、當年に於ける彼等の觀察及び期待の誤りなりしことを證明したのみならず、唯物史觀の信奉者として、彼等自身が明かに其の誤謬を認めた。私は次に、エンゲルスが一八九五年（彼れの死に先だつ僅ばかりの前）に、マルクスの『佛蘭西に於ける階級闘争』に序した一文の中から、その證據を擧げやうと思ふ。エンゲルスはいふ。

『歴史は、吾々及び吾々と同じやうに考へた(即ち一八四八年代に無産者の政治的革命が間近かの將來に来ることを考へた)總ての者が、間違つてゐたことを證明した。歴史は明白にした、——大陸に於ける經濟的發展の状態は、資本家的生産の廢除のために、當時まだ——遂に熟してゐなかつたことを。歴史は之を、かの經濟的革命(異常なる經濟上の發展を意味する)によつて證明した。その經濟的革命は、一八四八年以降全大陸に波及し、かくて佛蘭西、奧太利、匈牙利、波蘭、及び最近には露西亞に於て、始めて本當に大工業を普及し、なほ獨逸を化して正に第一等の工業國となすに至つたものであるが、此等は總て、資本主義的基礎の上に行はれたのであり、從て資本主義的組織は一八四八年代に於てまだ甚だ多くの發展の餘地をもつてゐたものと看做さなければならぬ。』

『一の社會組織は、總ての生産力が其の組織内で餘地ある限り其の發展を爲し遂げた後でなければ、決して顛覆し去るもので無い』といふ信念の上に立つ限り、エンゲルスが晩年に於て斯様な反省の下に、『襲撃(Ueberumpelung)の時代、無意識なる大衆の尖頭に立つた僅な少數者によつて果さるべき革命の時代は、既に過ぎ去つた』と述懐したのは、甚だ當然である。

尙早なる社會革命は必ず失敗する。たとひ之を目的とした政治革命は成功しやうとも、それは差當り政治革命の成功だけに止まるの外はない。即ち政權の攫取者は代つても、社會の經濟組織

7) Marx, Die Klassenkämpfe in Frankreich, 1848 bis 1850. (Berlin 1895) S. 8.

8) 同上, S. 16.

は權力者の任意に變更することの出来ない物質的基礎の上に立つてゐるものだから、單なる政權の移動によつて俄に變更され得るものでは決して無い。だから、ハインドマンが其の近著⁹⁾に於て説明してゐるやうに、奴隸制廢止のための物質的諸條件がまだ具備されて居らぬ場合には、他の如何なる條件を具備してゐる奴隸一揆でも、それは多くは失敗に歸して居り、また假令成功した場合にでも、これがために奴隸制そのものは決して廢止されるといふことなく、只元の奴隸が新たに奴隸の主人になり、元の奴隸の主人が新たに奴隸にされる、といふ變化を生ずるのみのことである。思ふに此の道理は、社會主義的組織の建設を目的とする無産者の革命についても、亦た當然に當嵌まるであらう。時機尙早なる無産者の革命は、恐らく失敗するの外あるまいが、たとひ成功したにしても、少くとも當座の間は、單に政治革命としての成功に止まり、社會革命はさう容易に實現されはしないであらう。即ち當該社會は、従前無産者であつて新たに政權を攫取するに至つた人々の支配の下で、依然資本主義的に發展するの外はあるまい。

私は露西亞に企てられた社會主義の革命が、時機尙早のものであるか否かを知らない。けれども、其れはさうであつても無くても、今後數十年間に於ける露西亞の歴史は、社會組織進化の理法を知らんとする吾々に向つて、極めて有益なる無数の材料を提供するに相違ない。只それに基づいて、今日よりも猶は一層意識的なる社會運動の指針を示すことは、恐らく吾々よりより若き人々の仕事であるであらう。(完)

9) Hyndman, Evolution of Revolution, 1921, section 11, ch. IX.